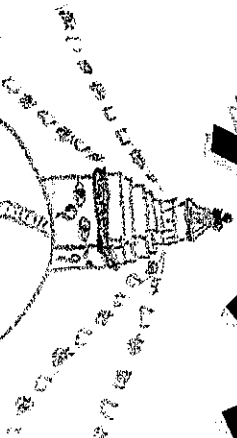


ネパールから

サマソタだよ!



反差別草の根交流の会「サマソタ」ニュースレター

VOL.1 (2013年8月15日発行)

「サマソタ」の始まり

2005年12月、ネパールのダリット (被差別カースト) 差別と闘う「フエミニスト・ダリット協会 (FEDO)」の2名の活動家が、部落解放運動の女性活動家たちに招かれて来阪し、さまざまな人権問題に取り組み人々も一緒に交流したのが、最初の出会いでした。

2006年12月、「今度は日本からネパールに行こう!」と、「ネパールのマイノリティに出会う旅」が始まりました。2回目は2008年8月、3回目は2010年8月でした。農村のFEDOの支部のグループを訪ねてホームステイをさせてもらい、交流した経験は何ものにも代えがたいものになりました。たまたまつしかかないカマドの前にお母さんや娘さんがしやがんで薪を焚き、ダルスーズ・ご飯...と一品ずつ順番に料理をしていました。「大きくなったら、この子の学費に」と、小さなグタを育てている女性もいました。農作業や水汲みのための貴重な時間を割いて、小さな庭先に座れないほどの女性や子どもたちが集まり、日々の厳しい暮らしを乗り切るためにどう力を合わせているのか、活動の様子を聴かせてもらいました。

ネパールのたくましく生き、活動する女性たちや人懐っこい子どもたちを大好きになった参加者たちが、「ネパールでも日本でも差別をなくしたい」「長く交流したい」と願って、反差別草の根交流の会「サマソタ」を設立しました。(サマソタは、ネパール語で“水平”の意味)そして、ネパールに関する学習会や時々ネパールから来日する友人たちとの交流、ネパール語の学習などを続けてきました。



ネパールに反だちができた (2010年8月)

発事故という、あつてはならない事態に私たちは陥ってしまいました。ちょうど、「サマソタ」の今後の活動について考えている頃でした。「希望」は前を向いて生きていく力になります。私たちは一つの「希望」を、貧しさや差別にも負けないで、たくましく生きていこうとしているネパールの人々との絆に、幸いにも見出すことができました。貧しい村で生まれ育ち、せつかく進級のための難しい試験 (SLC) に合格できても、年間約8,000円の学費を親も出せないために学び続けることができず、子どもたちへの就学支援活動です。

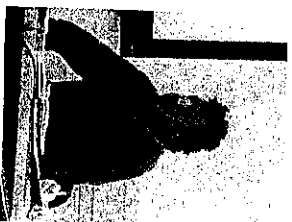
「サマソタ 10+2 就学支援」活動で、ネパールの子どもたちは“夢”や“希望”を手に入れることができます。その子どもたちは、まわりの多くの人々に、“夢”や“希望”を拡げてくれることでしょう。私たちにとっては、それが「希望」です。今、憲法9条に守られてきた暮らしも大きく変わるかもしれないという危機にも直面しています。差別をなくすためにも平和な社会でなければなりません。「サマソタ」は私たちの小さな感動から始まった活動ですが、より多くの人々の、次の世代の「希望」、平和を守って生きていこうとする大きな力になることを願ってやみません。

平和な未来を拓くために

2011年3月11日、東日本大震災の後、福島原

報告 「サマソタ10+2 就学支援基金」立ちあげ記念講演会

■講師はカマル・フヤルさん



カマル・フヤルさん

チヤル大学教員)をお迎えし、「学びを生きる力に」と題して、ネパールの教育事情についてお話を聴きました。

ネパールの開発ワーカーとして有名なカマルさんは、「開発とは幸せを分かちあうこと」を信条に、ネパールはもろろん、世界の各地に出かけ、幸せに生きていくために人と人との繋がりがいかに大切かを、参加者自ら気がつく参加型ワークショップのファシリテーターとして活躍されています。また、サマソタの就学支援活動のネパールにおけるパートナー団体のNGO「サグズン」の事務局長もされており、いつ会っても変わらぬ、静かな笑顔を見ていると、「もう一歩前に進みたい」と思っている世界のあちこちの人々から頼りにされておられることがよく理解できます。

■ネパールってどんな国？

ネパールは、8,848mのエベレストがそびえる世界の屋根ヒマラヤ山脈から南の平野部まで、その面積は日本の<北海道+四国+九州>と同じ広さです。人口は2,662万人(2011年)。18才以下は人口の52%で、60才以上は9%。平均寿命は女61才、男59才です。ネパールは、少子高齢化の日本とは対極の状況にあると言えます。都市部に17%、農村部に83%が住んでいます。その生活状況などの大きな違いがさまざまな格差問題を生み出しています。宗教は、ヒンドゥー教徒が81%で支配的ですが、10%の仏教、その他のキリスト教やイスラム教の人々ともいい関係で暮らしているそうです。ネパールでは130もの言語が使われており、多様な民族やカーストがネパール文化を織り成しています。それはカマルさんにとって、「ネパール

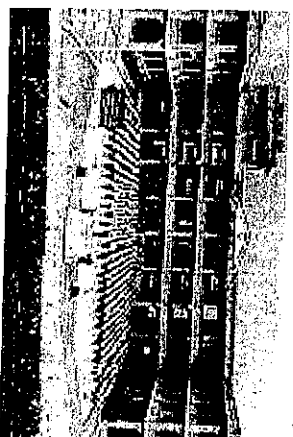
では毎日、さまざまな場面ですさまざまな違いに会い、フレキシブル」だそうです。ネパールに行ったことがある多くの人も同感できることでしょう。しかし、その違いが差別や暴力を生み出すという厳しい現実もあるのです。

■ネパールの教育制度

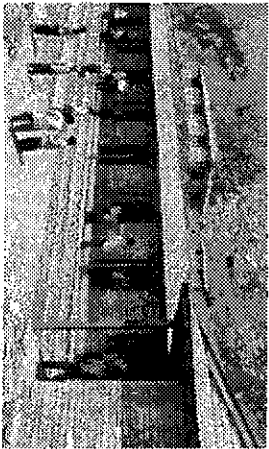
ネパールの教育制度は日本と少し違い、大学までは4つのレベルになっています。1~5年生が初等教育(日本の小学校に相当)、6~8年生は前期中等教育(中学校に相当)、9~10年生は中期中等教育(高校に相当)、11~12年生は後期中等教育(「10+2」、テンズララズツと呼ぶ)です。義務教育制度はありません。2007年の就学率は、初等教育91.9%、前期中等教育57.3%、中期中等教育36.4%でした。2008年の識字率(15才以上)は52%で、男63%・女35%でしたから、就学率も男女格差が大きいのではないかと想像できます。入学年齢は決まっておらず、大体6才くらいで入学しています。カマルさんは4才で入学し、日本では同一学年に同一年齢の子どもばかりがいるので驚いたそうです。

カトマンドゥに滞在すると気付きますが、子どもたちは革靴を履いて、私立学校ごとのさまざまな制服を着て通学し、いろんなスクールバスがよく走っています。農村で見かける、公立学校の水色のシャツと紺色のズボンやスカートの制服を着た子どもはほとんどいません。ネパールの子どもたちは、多様な教育環境で学んでいるのです。カトマンドゥには、校舎は立派なビルで、一カ月の学費が25,000Rs(これくらい)の金額で一カ月暮らしている家族は多い)、優秀で高給取りの教師が授業はすべて英語で行う私立校があります。農村には、上塗りもされていない煉瓦積み校舎に、カバンもなく、本と鉛筆だけを手に握って、サンダル履きで通う

子どもたちがたくさんいます。



(写真右:カトマンドゥにある私立学校)



地方の公立小学校のようす

このような公立学校では、初等教育は授業料無料・教科書無料配布です。とは

言っても、進級試験代・設備費・ノート・文具・制服などは、現金収入の少ない親の負担になるので、子どもが学び続けるには大きな壁です。農村部には人口の83%が住んでいるのですから、公立学校に通う子どもが圧倒的に多く、子どもの時の教育の質の格差は、その後の人生でも格差を生み出し、大きな社会問題だと言えます。

■ネパールの子どもは試験が大変

ネパールの学校では毎学年末に進級試験（テスト）が行われ、留年もあります。従って、子どもたちはいつもよく勉強しなければいけないしくみになっていくのですが、10年生卒業時には、高校卒業認定試験と大学（カレッジ、11～12年生、「10+2」）入学試験を兼ねているSLC（中等教育修了資格試験）が待ち構えています。合格者の得点は4ラソクに区分され、上位から希望の大学（カレッジ）・学部・学科に優先的に入学でき、企業への就職にもSLC合格は必須条件になっています。

SLCは「鉄の門」とも呼ばれ、全国一斉に統一問題で実施され、合格率50%前後という難関です。しかし、合格率100%のカトマンズの私学もあれば、10%の村の公立校もあります。裕福な家庭の子どもたちが通うカトマンズの私学は合格率を少しでもアップして“いい学校”になるために有料の補習を行い、町にはSLC対策塾もたくさんあります。教育の質の学校や地域格差は、SLCの結果にそのまま反映しているのです。カマルさんは、「教育によって格差が広がるのは問題だ。政府が格差をなくすために公立学校の質をあげる方針を出し、教育に力を入れ始めたのはうれしい」と、冷静に見ておられます。

■学ぶ機会を奪われる女の子たち

2006年、反王制派が内戦に勝利し、ネパールは2008年に「ネパール連邦民主共和国」になり

ました。しかし、未だ憲法も制定されないという政治的混沌が、残念ながら続いています。ネパール社会では、王家が信仰するヒンドゥー教の考え方が長年の間にネパールの社会規範になっていきます。カトマンズではだんだん薄れてきているとは言えます。ヒンドゥー教の聖典である「マヌ法典」では、女性の“三従”が説かれていきます。「女は、幼い時は父に、結婚してからは夫に、夫と死別してからは子どもに従わなければならない」というものです。女性が主体的に生きにくい、家長制社会です。

貧しい農村の女の子たちが通学を続けるためには、とりわけ厳しい状況があります。公立学校でも費用がかかるので、貧困のために親が子どもに学校を辞めさせる場合には、まず娘からです。日常的な家事労働や農作業の負担は娘に大きくかかります。女性の就労の機会が少ないので、娘の教育の必要性を感じにくいということもあります。地域によって、女の子は幼い頃に結婚させるという幼児結婚の慣習があります。本人の意思に関わらず、これらの理由により女の子の退学率・留年率は高く、就学率・SLC合格率・識字率の男女格差は小さくなりません。ネパールでは人身売買の被害に遭う女の子たちが跡を絶たないのでありますが、女の子が学ぶ機会を奪われていることにも一因があると言われています。

■教育は何のために

カマルさんは、「いい仕事に就けるのはたいへんいい学校を出た子で、教育が差別を作っている。私が行ったアジアの国でもそれが見られていた」と言われました。カースト制度が根付いているネパールでは、低カーストの仕事は多くが低賃金です。どんな親の子どもに生まれたかで、その子の学ぶ権利や職業選択の自由が奪われるのは理不尽なことです。「教育で大切なことは、卒業証書を手に入れることではなく、何を学ぶかだ。世界や社会について学ぶことが大切だと思う」と、カマルさんは言われました。世界や社会を読み解く力を身に付け、目の前に立ちほはだかる壁を乗り越え、自ら道を切り拓き生きて行く人間が大勢育ち、力を合わせることにより、公正な社会が実現することを、カマルさんは期待されています。

(報告者k)

■会員コーナー■ 「大切にしたい出逢い」

ナマステ！ 兵庫県伊丹市で、夫とガーナ人シエフトの三人で喫茶店をしています。三人の子どもを育てながら、学校教育の与える影響は大きいと感じてきました。2008年には、ドキュメンタリー映画『with…若き女性美術作家の生涯』の上映会を企画し、主人公である佐野由美さんの作品展示を同時開催しました。



ネパールにて。左が筆者

その年、サマソタのネパールスタディツアーに参加し、由美さんが勤めていた学校にも行くことができました。また、西部の最下層カーストの子どもたちが通う学校には予定を大幅に遅れた夜に到着。停電の暗闇の中、待っていてくれた子どもたちのキラキラした目に笑顔。貧しさを感じさせない豊かな表情！この子どもたちはもう会うチャンスはないだろうけど、あの時、自分には何ができるんだろう・・・と考えたことの一つ、ネパールの子どもたちへの支援がスタート！

一緒に、10円玉貯金で一年に3,000円の支援会員になってくださいまし！

(廣野敏子)



コラム 「日本の中のネパール」(1)

ネパールでは、1996年から10年間、ネパール共産党毛沢東主義派(マオイスト)による反政府武装闘争(人民戦争)が増しまわった。紛争の影響で農村に住みながら食料不足や貧困が深刻化し、多くの人が国内を離れ、海外に出稼ぎに働き始め、特に働き盛りの男性はザンザンと海外に出稼ぎに行き、送金が増えていく。その結果、国内に現存するネパール人の数は、2010年には23万人。今では女性の出生率も増えています。

日本でのネパール人の外国人登録者数をみると、1990年は339人、2000年は3,649人、2012年はなんと24,073人と、かなり高い増加率です。いまや、日本の外国人登録者数の第10位にまでなりました。街中でネパール人を見かける機会も以前より増えたように感じます。では、どんな人たちが来ているのでしょうか？

また続きは、次号で！！

(山)

【編集後記】

暑さ真つ盛り、みなさまお変わりありませんか。6月、ネパール・北インドでは豪雨による洪水・がけ崩れで多くの人が犠牲になったそうです。家族を失くした子どもたちもいるかもしれませんね。自然よ！ネパールの人たちにやさしくしてね。

(k)

サマソタだより VOL.1

発行年月日：2013年8月15日

編集・発行：反差別草の根交流の会「サマソタ」

連絡先：兵庫県伊丹市平松7-1-16 山本方

E-mail: samanta_sgid@yahoo.co.jp

URL <http://www.samantajapan.jimdo.com>